序

昨年あたりからはじまった謎の「社ゼミ人気」は、今年も続いたようで、なんと本年度は1位指名全員を受け入れることができないという事態となった。かつて「シャリントウ」とまで言われた時代は過去のものなのか？まだ予断は許さないが、正規採用で教員となる者が出てきたのも、ある意味変化の兆しと言えなくもない。今年は、新たに5名の1年生を迎え、2年生6名、3年生4名、4年生4名、大学院生1名を加えて、総勢20名のゼミとなった。人が増えるのは、喜ばしい反面、いろいろと面倒な部分もあったりする。特に、来年度の教育実習は今から憂鬱である（こんなことを書いてすまんのう）。

本年度も、前期は、文献購読を中心に、また、後期はゼミ誌作成を中心に行った。今年も、特に後期に、金曜に会議や出張が入ることが多く、教員不在でのゼミが多くなる傾向は、今年も同じであった。

文献購読は、前期は主に好井裕明の『「あたりまえ」を疑う社会学 質的調査のセンス』（光文社新書、2006年）を、後期は見田宗介の『社会学入門』（岩波新書、2006年）をテキストとした。今年はオーソドックスな社会学の入門書の購読となった。社会学ゼミを名乗りながらも、あまり社会学らしいことをしてこなかったのが、個人的には新鮮であった。

本年度のゼミ誌は、ゼミ旅行の訪問先である積丹半島の諸々を取り上げている。今年は、7月にゼミ旅行を決行するという、新たな展開となった。距離的にはかなりあったが、かなりの区間を高速で移動できたので、あまり苦にはならない旅であったように思う。それに、3.11直後であったこともあって、ノリで泊原発の見学を挟み込んだが、個人的には貴重な経験となった。また、カーナビに騙されて迷い込んだ積丹の酪農地帯も、振り返ってみれば面白い経験であった。

昨年40になった。孔子大先生は「不惑」とのたもうたが、未だに迷いまくりの人生である。が、何か新しい道が拓けてきたように思える一年でもあった。学生と調査してきた冷熱エネルギーによるまちづくりに関わってテレビデビューを果たし、新聞にも3回載った。それ自体は何の自慢にもなるものではないが、自分が信念を持って取り組んできたことがメディアの注目の対象となるということは、素直にうれしいことである。今までになく多忙な一年であったが、その多忙さは充実したものでもあった。

閉塞感漂うこのような時代であっても、ささやかであれども希望を失うことなく、前に進む力を失わないようにしたい。若干唐突かもしれないが、学校教育において、社会科教育に求められているのは、人として生きるための知識・能力を児童・生徒に身に付けさせることと同時に、それらを駆使して、自らの生きる社会を希望に満ちたものにするかということであると思う。とかく批判の対象として取り上げられることの多い学校教育だが、そうした世間の冷たい風に負けないよう、強い心をはぐくんでほしい。

角